

学校のちよつといい話 21

前我孫子市立我孫子第二小学校校長

鍵山 智子



「失敗（しっばい）と書いて、成長（せいちょう）と読む」

ある時、本の中で「失敗と書いて、成長と読む」という言葉に出会った。子どもは、失敗をしながら、その失敗から学びを得て、成長していく。私自身も思い返せば、両親にハラハラドキドキさせた子ども時代があったように思う。

私が初めて親となったときも、今も心に響いている言葉がある。それは、「子どもがお腹にいる間は、なんでも親の言うことを聞いてくれるが、子どもが産まれたら親の言うことは聞いてくれない。一個の人間である」とい

う職場の先輩からの言葉である。

当たり前前のことだが、子どもとはなんでも親の言うことを聞いてくれる存在だと思いついてしまふ節がある。頭でわかっているけど、俗に言われる「這えば立て、立てば歩め」の発想も踏まえ、親は自分が描いた既定の路線に子どもをのせたいと思いがちだが、なかなかそうはいかないことが現実であり、それが子ども本来の姿である。「親の意のままになるのは、お腹の中にいるときだけ」と思っているらば、子どもに過度な期待を押し付けることもなく、子どもが本来持っている生きる力を削ぐこともないのでないかと考えている。

私は市の教育研究所で、お子さんや親御さんの悩みを伺う機会を得た。子どもが誕生日を迎えるように、親も子どもと共に一年一年成長していく。「子どものことを外部機関に相談する」ということは、親にとっては、

かなりハードルの高いことでもあると思った。そうした中で、子どものために関わりを持つととされている親の姿から、直ぐに結果に結びつくとは限らないかもしれないが、子どもにとっての目の前の親の姿はとても大きな存在であることは確かだと感じるが多々あった。

直接お子さんに関わることはできなかったが、親御さんを通

して、お子さんの姿を伺い、話し合ううちに、少しずつお子さんに変化がみられ、自分の将来の姿について親子で共に話す時間が持てるようになった方が何人もおられた。

子どもが頼れる一番身近な存在が「親」である。子どもの力を信じつつ、親自身も独りで悩みを抱えず、誰かに相談することで、子育てのヒントを得て、子どもに繋げる。そうした親の姿は、子どもも身近な人と繋がりを持ち、広げる機会を知ることにもなる。「子は親を見て育つ」とは言われるが、子どもに注がれる親の愛情は、時間が必要なこともあるが、必ずや子どもに届いていると信じている。

今、教師という仕事を続けていられるのは、こうした多くの出会いから学べたお陰である。人との「縁」に感謝しながら、新たな出会いを待つ私がいる。

著者との対談動画

<https://www.morality.jp/educatorseminar/>

[jp/educatorseminar/](https://www.morality.jp/educatorseminar/)

[moral-education/](https://www.morality.jp/educatorseminar/)

